



玦状耳飾系統・起源論概観

川崎 保 (財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター調査研究員

1 はじめに

日本列島の「縄文時代」(旧石器時代の存在が確認される以前は石器時代)は、のちの弥生時代や古墳時代に比べて、列島外の諸文化とはあまり関係がないとみなされてきた。

その中で稀有な存在であるのが「玦状耳飾」である。その名称は日本考古学史上割合早く付けられた。当初は使用民族や文化の系統の問題に、後には縄文時代の実年代の推定のために大陸の玦との比較が行われた。

系統(あるいは系譜)・起源論は日本列島自生説と日本列島外・大陸起源説に大別できるが、現在はそうした問題にとどまらず、縄文時代の社会や文化の中での位置づけも積極的に行われるようになってきている。しかし、縄文時代の社会や文化を東アジアの中で位置づける上でも、玦状耳飾の系統・起源論を避けて通れない。

よって、今後の系統・起源論研究さらには縄文文化の位置付けなどの研究に多少なりとも資するところあればと思い、その研究史を概観する。

2 石環から玦状耳飾へ

玦状耳飾の系統・起源論の研究史については、藤田富士夫の研究(藤田1989)が詳しい。筆者もかつて簡単にまとめたことがある(川崎1998)。これらの論文とも多少重複するがここでもざっと概観する。

「玦状耳飾」は当初「石環」と呼ばれていた(大野1911)。柴田常恵(1917)は『説文』などを引用し「玦様の石製品」と呼称しているから、中国の玉器の「玦」と関係があるとする見解があったのは興味深い。

その後、大阪府国府遺跡の調査で、多量の人骨の中が検出された。そのうち6体に石環が頭蓋骨の耳の辺りから対になって「石環」が出土(西口1983)、石環が耳飾であったという証拠が得られた(大串1920)。玦状耳飾(あるいは玦様耳飾)という名称が定着していったようだ。

ただし、系統については、喜田貞吉が日本列島の先住民族としてのアイヌ民族使用説を唱えた(喜田1918)。鳥居龍蔵は大陸からの系統を考え、大和民族が使用したものとし、古墳時代の耳環につながるものと考えた(鳥居1923)。調査にかかわった梅原末治、内藤湖南、浜田青陵は使用民族についてはともかく、玦状耳飾が中国から伝来したものと推測したようである(西口1983)。

しかし、その後の梅原末治の集成(1923)、谷川(大場)磐雄(1924)、藤森栄一(1930a・b)の研究によって、玦状耳飾が石器時代(縄文時代)の遺物であり、これが古墳時代の耳環には系統上つながるとは考えられないことがわかってきた。

3 樋口清之の研究－日本列島自生説－

戦前の研究の一到達点を示すのが樋口清之の研究である。樋口は全国の玦状耳飾の類例

を集成し、分類。またこれらの型式学的な変化を想定し、変遷案を提示した。また、中国地方や東北地方に地域色のある珉状耳飾が存在することを指摘した（樋口 1932）。

系統・起源論については 1) 中国の珉は日本の珉状耳飾と異なり佩玉である。2) 中国の珉は玉製であるが、日本の珉状耳飾は石製である。という点を指摘し、両者に系統的な関係はないとした。

4 戦後の研究－大陸起源説の復活と反論－

戦後、樋口の珉状耳飾変遷案が層位学的な根拠に基づかないものであり、珉状耳飾出現期（縄文時代前期初頭）の形態が異なることが明らかになった。山内清男は、縄文時代の実年代を推定するために日本列島縄文時代の文物と大陸の文物の比較を積極的に行い、中国新石器時代青蓮崗文化の珉と日本列島の珉状耳飾が関連するとした（山内 1969）。

これに対し芹沢長介は、1) 放射性炭素 14 の年代測定法によれば日本列島の縄文時代前期の年代と中国新石器時代青蓮崗文化では、前者の方がはるかに古い。2) 日本列島で最古とされる珉状耳飾と青蓮崗文化の珉とでは形態が異なる。3) 日本列島には早期に遡るとされた大分県川原田洞穴出土例のように骨角製のものがあり、これが日本列島の珉状耳飾の起源であるとした（芹沢 1965）。

高山純は、中国の類例を集成した。1) 中国最古の珉は仰韶文化晩期に対比される青蓮崗文化に出現する。2) 珉は必ずしも玉製ではなく、石製も多い。3) 文献資料によれば珉は腰飾であるが、考古資料では新石器時代から戦国時代まで耳飾として使用された例がある。4) 文献資料によれば男性が装着していたが、考古資料によれば女性の装着例もある。といった点を指摘し、中国の珉と日本列島の珉状耳飾に関係があるとした（高山 1967）。ただ高山は日本列島の珉状耳飾が中国の珉に影響を与えた可能性を指摘する。

梅原末治（1971）、黄土強（1975）も中国青蓮崗文化の珉と日本列島の珉状耳飾が関係するという説である。

一方で、渡辺誠は、東日本に珉状耳飾が多く、西日本に確実に出現するのは前期中頃だとして、大陸起源とは考えにくいと言う（渡辺 1973）。上田耕も九州では確実に層位的に東日本より古いといえる例はなく、東日本から伝播したものとする（上田 1981）。

5 藤田富士夫・安志敏の研究－江南起源説の提唱－

系統・起源論を解明するためには、大陸起源説にしても日本列島自生説にしても、中国新石器時代の珉と日本列島の縄文時代の珉状耳飾の対比が必要とされた。徐々に中国江南地方の発掘調査の成果が明らかにされ、青蓮崗文化よりさらに先行する河姆渡文化の存在が明らかになってきた。

こうした中、藤田富士夫は日本列島の珉状耳飾の最古の形態が北陸にあることと、中国江南地方の新石器時代の玉珉に類似することから、中国江南の玉珉が北陸に伝播したと推定した（藤田 1978）。江坂輝彌は、漆などの文化とともに江南から珉状耳飾が伝わったと推測する（江坂 1981）。西口陽一は、河姆渡文化に珉が伴い、放射性炭素 14 による年代も縄文時代前期より遡ること、河姆渡文化でも縄文時代前期の文化においても女性が装着

する風習が共通することから、河姆渡文化の玦が日本列島に伝わったとした（西口1983）

安志敏は、河姆渡文化の玦が日本列島の玦状耳飾では最古の形態とされる指貫形であること、河姆渡文化が縄文時代前期に匹敵するような古さであることを指摘した（安1984）。さらに安は、玦状耳飾が出土している福井県鳥浜遺跡に、漆器が出ていることにも着目し、河姆渡文化から縄文文化に与えた文化要素として漆器、干欄式建築などのものがあるとし、これらとともに玦も日本列島に伝来したと推測した。

こうした江南から日本列島（北陸）という一つの経路が提示されると、具体的なルートがいくつか想定された。古くは梅原末治（1971）や黄士強（1975）が考えた台湾、薩南諸島、九州というルートをも鈴木重治も想定する（鈴木1987）。

こうした台湾、南島、九州というルートについてはすでに述べた渡辺誠、上田耕のほかにも水ノ江和同（1992）の否定的な見解がある。

今村啓爾は、河姆渡文化（5,000～4,000B.C.）と玦状耳飾が出現したという縄文時代早期末（4,500～4,000B.C.）がよく対応することから、河姆渡文化から日本列島に伝播した可能性は十分あるとしながらも、中村慎一（1987）が指摘するように機能的要請による独立発生の可能性や伝播経路の途中にあたる朝鮮半島に類例がほとんど見られない点に注意すべきとした（今村1987）。

中山清隆も今村と同様江南から北陸へ伝播したとするならば、当然経路にあたる朝鮮半島やさらに北部九州などに類例が少ないことや、中国遼寧省査海遺跡の玉玦やロシア沿海州チョールタヴィ・ヴァロータ遺跡の耳飾に注目し、江南以外にも古い類例があることを指摘した（中山1992・1994）。

6 近年の研究－北方起源説の台頭－

玉玦と玦状耳飾という一つの器種どうしの対比だけでは比較に限界があると考え、玦状耳飾と同じ石材・玉で製作された装身具をセット（組み合わせ）として捉え、相互に比較すべきことを筆者は主張。装身具各々の変遷のほかにセットの変遷を提示した（川崎1996）。

また、藤田富士夫の編年で最古とされた指貫形の玦状耳飾以前に、中央孔が広いドーナツ形（浮輪形）の玦状耳飾が早期末に出現していること、また玦状耳飾が出現した段階に管玉や篋状垂飾がセットになっている可能性が高いことを指摘した（川崎1997・1998）。

郭大順も査海遺跡の玉玦が日本列島の玦状耳飾に影響を与えたとし（郭1998）、麻柄一志は北海道の石刃鎌文化の石製装身具に着目し、本州島やその以西より、玦状耳飾や篋状垂飾の出現が早いことに着目している（麻柄1998）。

藤田富士夫も福井県桑野遺跡の玦状耳飾と篋状垂飾や同一形態の篋状垂飾が中国査海遺跡で出土していることに着目（藤田1996）。また玦状耳飾の形態分類と変遷を見直し、玦状耳飾にいくつかの祖形があり、江南ルートと北方ルートが存在したことを推定している（藤田1998）。最近、藤田はその北方から伝播してきたタイプと想定する環状型玦状耳飾の類例を整理している（藤田2003）。

こうした、日本での大陸起源説の進展に呼応するように、鄧聡はさらに明確に日本の珓（状耳）飾が中国東北からロシア沿海州を経て、日本列島へ伝播したと指摘する（鄧 2000）。鄧はさらに長江流域の河姆渡文化の珓も中国東北の文化的影響と指摘し、東アジアの珓（状耳）飾をはじめとする装身具類の起源が中国東北にあるとした。

筆者も珓状耳飾、管玉、篋状垂飾のセット関係は中国興隆窪文化やロシア沿海州のルドニンスカヤ文化のチョールタヴィ・バロータ洞穴でも認められるので、日本列島の最古の珓状耳飾とそのセットの装身具は中国東北地区やロシア沿海州の影響と考えている（川崎 2002・2003）。

7 小結

土肥孝は大陸起源説自体に否定的である（土肥 1990・1997）。大貫静夫はチョールタヴィ・ヴァロータ洞穴の「珓状耳飾」をいち早く紹介する一方（大貫 1994）、直接日本列島の珓状耳飾の起源には論及しないが、長江の珓に匹敵する古い興隆窪文化の珓が認められたことは、北方の珓と南方の珓が無関係であるかもしれず、これらが多元的に発生した可能性を指摘する（大貫 1998）。

また、中山清隆（1992）が指摘したように（中山は必ずしも大陸起源説を否定していないが）伝播してきたというならば、大陸からの搬入品がどれであるのか示さねばならないのかもしれない。しかし、中国の玉器の材質は軟玉（岩石学的にはネフライト、透緑閃石・透閃石岩）であり、これは日本列島にも産出する。まだ有効な産地同定を理化学的分析で求めることはできていない。将来的には可能かもしれないが、現在の段階ではやはり考古学的手法でアプローチしていくことが重要だと考える。

中国東北地区の考古資料の増加や少ないながらもロシア極東地方の考古資料も明らかになってきて、珓・珓状耳飾が東アジア全体に広がっていることは明白になった。また、珓状耳飾にともなう装身具の内容、管玉、篋状垂飾などの存在が明らかになってきた。

筆者はすでに述べてきたように、日本列島の珓状耳飾は中国東北地区やロシア沿海州の珓と関連があったものと考えている。ただし、谷藤保彦によれば「璜」「管」「墜」などといった江蘇省北陰陽宮遺跡の装身具に類似した資料が日本列島の縄文時代早期末から前期初頭に存在するという（谷藤 2001・2002）。「璜」の問題はかつて藤田（1992）が指摘し、江南の影響の証左としたもので、北方経路だけで日本列島の珓状耳飾の系譜や起源、さらにその展開を説明できるかどうかは今後の研究課題だろう。

また、資料が若干増えてきたとはいえ、朝鮮半島の類例が少ない（金 1990・朴 2003）。江南ルートあるいは北方ルートだとしても朝鮮半島をまったく介在しないとは考えにくい。さらに朝鮮半島の珓（状耳飾）はまだ、古いタイプのものが見つかっておらず、系統・起源問題からいえば、朝鮮半島での系統・起源も日本列島の珓状耳飾の系統・起源問題の重要な鍵を握っているのかもしれない。

鄧聡が指摘するように、年代的に近寄っているだけでなく、東アジアに広がる玉文化の装身具の各器種が多少の変化はありながらも共通する点や製作技法（擦切技法）にも関連

性が見られることもこれらが相互に無関係といえないだろう。

本稿では触れられなかったが、玦状耳飾の始原期には見られないが、縄文時代前期末から中期初頭に広範囲に日本列島に広がる「の」字状石製品も大陸との関係が示唆されており（大竹 1999）、継続して複合的な文化的な影響があったことも視野に入れて、玦状耳飾に代表される当該期の玉文化の様相を研究していく必要があるだろう。

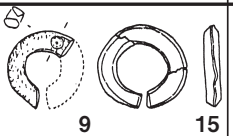



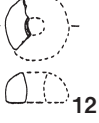
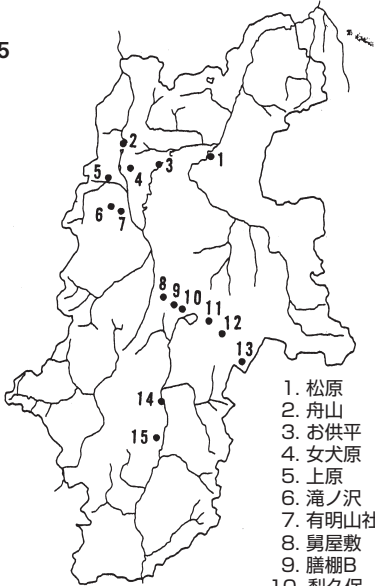

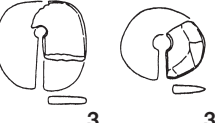
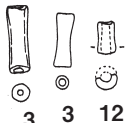
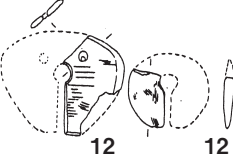

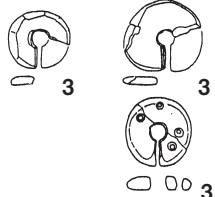

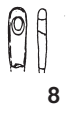
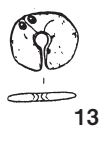

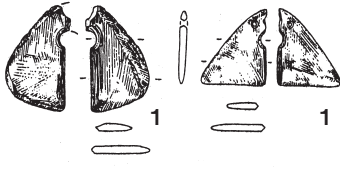
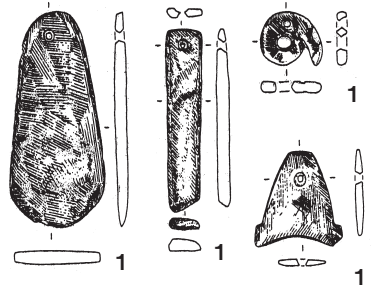
引用参考文献

- 安 志敏 1984 「長江下游史前文化対海東的影響」『考古』3
- 今村啓爾 1987 「まとめと今後の問題点」『東南アジア考古学会報』7
- 上田 耕 1981 「九州における玦状耳飾について」『鹿児島考古』15
- 梅原末治 1922 『鳥取県史蹟勝地調査報告第一冊 鳥取県下に於ける有史以前の遺蹟』鳥取県
- 梅原末治 1971 「史前の玦状耳飾に就いての所見」『日本古玉器雑攷』吉川弘文館
- 江坂輝彌 1981 「渡来植物からみた縄文時代の地域性」『地理』9, 古今書店
- 大串菊太郎 1920 「津雲貝塚及国府石器時代遺蹟に対する二三の私見」『民族と歴史』3-4
- 大竹憲治 1999 「『の』字状石製品と古代中国玉類との類似的要素 - 大越町牛頭場と岡平の事例を中心に -」『甦る大越町の埋蔵文化財』福島県大越町教育委員会
- 大貫静夫 1994 「朝鮮半島・沿海州・サハリンの土器出現期の様相」『環日本海地域の土器出現期の様相』
- 大貫静夫 1998 『東北アジアの考古学』同成社
- 大野雲外 1911 「志摩発見の石環に就いて」『東京人類学雑誌』27-5
- 郭 大順 1998 「玉のロードと縄文人から文明のメッセージ」『富山市日本海文化研究所報』21
- 川崎 保 1996 「『の』字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
- 川崎 保 1997 「縄文時代の篋状垂飾について - 福井県坂井郡金津町桑野遺跡出土資料を中心に -」『信濃』49-4
- 川崎 保 1998 「玦状耳飾と管玉の出現 - 縄文時代早期末・前期初頭の石製装身具セットの意義 -」『考古学雑誌』83-3
- 川崎 保 1999 「日本海をめぐる二つの遺跡から見た玦状耳飾と装身具」『考古学に学ぶ - 遺構と遺物 -』同志社大学考古学研究室
- 川崎 保 2000 「石製装身具に見える外来要素」『考古学ジャーナル』454
- 川崎 保 2002 「東アジアの中で見た玦状耳飾の起源と展開」『長野県の考古学』II, 長野県埋蔵文化財センター
- 川崎 保 2003 「チョールタヴィ・ヴァロータ洞穴の土器・装身具および骨角器についての一考察」『立命館大学考古学論集』III
- 喜田貞吉 1918 「河内国府遺蹟最古の住民」『歴史地理』32-4
- 金 相冕 1990 「清道沙村里遺蹟発掘調査報告」『考古学誌』2 韓国考古美術研究所
- 黄 士強 1975 「玦的研究」『国立台湾大学考古人類学刊』37・38
- 柴田常恵 1917 「玦様の石製品」『人類学雑誌』32-11
- 鈴木重治 1987 「変革期の装身具にみる地域性 - 玦状耳飾と南海産貝製腕輪を中心に -」『考古学と地域文化』同志社大学考古学研究室

- 芹沢長介 1965 「周辺文化との関連」『日本の考古学』Ⅱ, 河出書房新社
- 高山 純 1967 「中国の玦」『古代学』13-3・4
- 谷川磐雄 1924 「玦様耳飾に就いて」『考古学雑誌』14-4
- 谷藤保彦 2001 「『璜状頸飾り』について－中国新石器時代の視点から－」『縄文時代』12
- 谷藤保彦 2002 「前期初頭の玉飾りについて－中国新石器時代の視点からⅡ－」『縄文時代』13
- 土肥 孝 1990 「美・藝術そして独占の始まり－アクセサリー－」『月刊文化財』326
- 土肥 孝 1997 『日本の美術 369 縄文時代の装身具』至文堂
- 鄧 聡 2000 「東亜玦飾四題」『文物』2期
- 鳥居龍造 1923 「梅原氏の鳥取県報告を讀みて」『人類学雑誌』38-2
- 中村慎一 1987 「中国出土の玦状製品」『東南アジア考古学会会報』7
- 中山清隆 1992 「縄文文化と大陸系文物」『季刊考古学』38, 雄山閣
- 中山清隆 1994 「東アジアからみた玦状耳飾の起源と系譜」『地域相研究』22
- 西口陽一 1983 「耳飾から見た性別」『季刊考古学』5, 雄山閣
- 樋口清之 1932a 「玦状耳飾考－石器時代身体装飾品之研究其一－」『考古学雑誌』23-1
- 樋口清之 1932b 「玦状耳飾考（二）－石器時代身体装飾品之研究其二－」『考古学雑誌』23-2
- 藤田富士夫 1978 「玦状耳飾の起源について」『富山史壇』69
- 藤田富士夫 1989 『玉』ニューサイエンス社
- 藤田富士夫 1990 『古代の日本海文化 海人文化の伝統と交流』中央公論社
- 藤田富士夫 1992 『玉とヒスイ』同朋舎
- 藤田富士夫 1996 「ヘラ状垂飾についての一考察」『画龍点睛』山内先生没後 25 年記念論集刊行会
- 藤田富士夫 1998 「日本列島の玦状耳飾の始源に関する試論」『東亜玉器』
香港中文大学考古藝術研究中心
- 藤田富士夫 2000 「縄文文化の中の外来要素」『考古学ジャーナル』454
- 藤田富士夫 2003 「環状型玦状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』
- 藤森栄一 1930a 「玦状耳飾を出せる諸磯式遺跡（其一）」『信濃考古学会誌』2-1
- 藤森栄一 1930b 「玦状耳飾を出せる諸磯式遺跡（其二）」『信濃考古学会誌』2-2
- 藤森栄一 1935 「山国飾玉襟記」『考古学』6-7
- 朴 玠貞 2003 「'02 高城文岩里先史遺蹟発掘調査」『韓国新石器研究』5
- 麻柄一志 1998 「石刃鎌文化の石製装身具」『富山市日本海文化研究所報』20
- 水ノ江和同 1992 「九州の玦状耳飾」『考古学と生活文化』同志社大学考古学研究室
- 山内清男 1969 「縄文草創期の諸問題」『ミュージアム』224
- 渡辺 誠 1973 「装身具の変遷」『古代史発掘2 縄文土器と貝塚』講談社

Chronology of stone(jade) accesories of JOMON culture

1

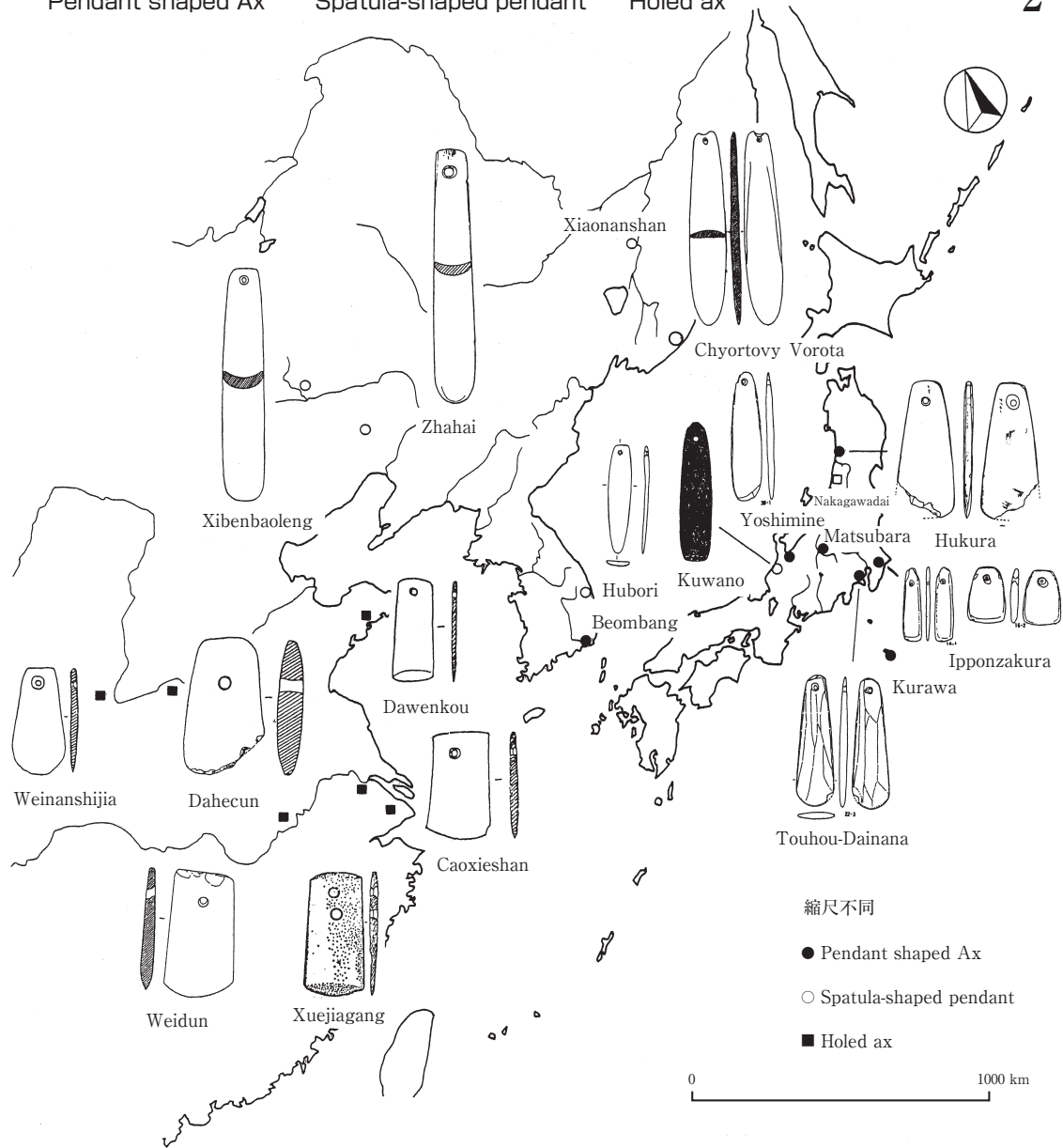
Phase C14.y	Stage	earring	bead	other pendants	
B.P.6300 Initial	final	 9 15	 15	 15	
Early	1	 12 12	 12	 <p>0 20 (km)</p> <p>Nagano prefecture in Japan</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 松原 2. 舟山 3. お供平 4. 女犬原 5. 上原 6. 滝ノ沢 7. 有明神社 8. 舅屋敷 9. 膳棚口 10. 梨久保 11. 棚畑 12. 阿久 13. 日向 14. 中越 15. カゴ田 	
	2	 3			
	3	 3 3	 3 3 12		
	4	 12 12	 12		
	5	 3 3	 3		 8
	6	 13	 8		
B.P.4900 middle	1	 1 1		 1 1 1	

These C14 years depend on 5568y, don't depend on 5730y.

The period of Jomon culture is divided into six phases as follows:

Incipient,Initial,Middle,Late and Final.

Pendant shaped Ax Spatula-shaped pendant Holed ax



東アジアの笥状垂飾及び関連資料

Ketsu-shaped earring

3



東アジアの玦状耳飾